

サン・テグジュペリの「青年時代の手紙」の 内容と解説

加 藤 宏 幸

サン・テグジュペリの「自分で勝手に作り上げた女友だちへ宛てた青年時代の手紙 1923-1931」*Lettres de jeunesse à l'amie inventée 1923-1931*¹⁾は、題名に示された通りであるとすれば、「自分勝手に作り上げた女友だちへ宛てた」手紙であるということになる。しかし実際には、この書に収められた手紙は、サン・テグジュペリの女性の友人ルネ・ド・ソーシーヌ Renée de Saussine に宛てて書かれたものである。「自分で勝手に作り上げた」という言葉は書簡 7 に現れる表現であるが、これらの手紙のすべてを読めば、この表現がこの書にふさわしいことが分かるであろう。

いずれにしても、23 歳から 31 歳までの多感な青年時代にルネ・ド・ソーシーヌ（愛称リネット Rinette）に宛てて書かれた 25 通の手紙には、その時々我们身边に起こった事柄が記されていると同時に、リネットに対するそこはかとない友情または愛情の言葉が数多く認められる。リネットを思う優しい気持が日常の言葉で美しく表現されており、われわれの心を激しく打つ。

この素晴らしい手紙の一通一通について、その内容を彼の生涯と関連づけて紹介し、それに解説を加えてみたい。これらの手紙には、小説家としての資質がすでに認められるだけでなく、一部の手紙には彼の文学を理解する鍵が秘められている。

1917 年、サン・テグジュペリは、海軍兵学校 École Navale の入学試験の準備のために、ボシュエ学院 École Bossuet に、つづいてサン・ルイ高等中学校 Lycée Saint-Louis に入学する。そこでソーシーヌ・ド・ベルトラン Saussine de Bertrand と親しくなり、しばしば彼の家を訪れるようになった。

ソーシーヌ家の人々は、いつも彼を暖かく迎えてくれた。ソーシーヌ氏は作曲家で、彼のサロンにはレイナルド・ハーン Reynald Hahn²⁾、ラヴェル Ravel³⁾、プーランク

1) SAINT-EXUPÉRY (Antoine de), *Lettres de jeunesse à l'amie inventée 1923-1931* (*Œuvres complètes de Saint-Exupéry*, tome III, Paris, Éd. du Club de l'Honnête Homme, [© 1976], pp. 283-379).

2) フランスの作曲家 (1875-1947)。歌曲、バレエ、オペレッタなどの作品によって名声を得た。

3) フランスの作曲家 (1875-1937)。近代音楽の開拓者の一人。その技法の特徴は、大胆なリズム、魅力的な和声、輝かしい管弦楽法にある。

Poulenc⁴⁾, フォーレ Fauré⁵⁾ などがよく訪れていた。彼には4人の娘と1人の息子がいた。4番目の娘がヴァイオリニストのルネで、末っ子の息子がベルトランである。

ルネ・ド・ソーシーヌは、「青年時代の手紙」に付した「序文」*Préface*の中で、次のように述べている。

「私の家族の中で、彼に対する意見は分かれていました。

『なんて素晴らしい青年だ!』と父は言っていました。しかし、母や姉たちは彼の無口に驚いていました。

年下であった私たちは、子供によってはいともたやすく築かれたり乗り越えられたりできる沈黙の城壁の後ろに、彼の本質を見つけることができました。彼と同じように私たちもまだ子供でしたから」⁶⁾

1919年6月、サン・テグジュペリは海軍兵学校の入学試験に失敗した。彼がどんな道を選ぶべきかについて、彼の友人たちはしばしば議論した。その議論はサン・ジェルマン・デ・プレのカフェのテラスで行われたので、それらのカフェは、彼の思い出の中でもっとも貴重なものになるであろう。

結局彼は、美術学校 *École des Beaux-Arts* の建築科に登録する。セーヌ通りのルイジアヌ・ホテルに住み、物質的にも精神的にも苦しい生活を送る。彼の最大の慰めは、ソーシーヌの家で開かれる音楽会であった。彼女は述べている。

「サン・ギョーム通りの家で音楽会が開かれたときには、彼は心を奪われ夢中になって耳を傾けました。時には、私のヴァイオリンを手に取り、造化の神のごとく即興で演奏することがありました」⁷⁾

1921年2月、サン・テグジュペリは、兵役に服するために、ストラスブール *Strasbourg* の第2飛行連隊に入る。1922年10月、少尉に昇進し、ブルジェ *Bourget* の第33飛行連隊の戦闘機部隊に配置転換となる。着陸の際に事故を起こし、頭蓋骨を骨折する。ソーシーヌは述べている。

「ブルジェで、第33飛行連隊のこの少尉は、簡単にアクロバット飛行をします。すでに婚約していたのに、ばかげたことをし、超低空飛行をしたりします。それで、《死刑囚》というあだ名が付けられます。ある日曜日、町のはずれを低空で飛んでいるとき、ガス欠で失速し、転覆します。頭蓋骨の骨折、長い回復期間。望まれた通りに退役したにもかかわらず、婚約者の家族と仲たがいます」⁸⁾

この時期に、サン・テグジュペリはすでに婚約していた。婚約の相手はルイズ・ド・

4) フランスの作曲家(1899-1963)。オーリック Auric, ミヨー Mihaud, オネガー Honegger 等と《6人組》を結成し活躍した。

5) フランスの作曲家(1845-1924)。印象派の音楽の先駆者。歌曲、ピアノ曲、室内楽曲に優れていた。

6) SAINT-EXUPÉRY, *op. cit.*, p. 286.

7) *Ibid.*, p. 287.

8) *Ibid.*, pp. 288-289.

ヴィルモラン Louise de Vilmorin である。彼女の家系は植物学者・種子商人の古い家系で、当時の彼女の家には、有名な文学者・芸術家・政治家がしばしば訪れていた。彼女はそのような文化的雰囲気の中で育った。股関節痛のため 20 年近くも病床にあったが、1923 年にようやく病が癒えたときには、年頃の娘となっていた。後に彼女は作家となり、社交界を舞台とした恋愛小説を数冊書き、そのうちの 1 冊は映画化された。

サン・テグジュペリがサン・ルイ高等中学校で、海軍兵学校の入学試験の準備をしていたとき、級友の一人にオノレ・デティエンヌ・ドルヴ Honoré d'Estienne d'Orves がいた。この親友を通して、彼はヴィルモランを知り、ただちにほれてしまった。

彼は、ヴィルモランの家庭環境が自分の家庭環境と全く異なっていることを認めたが、彼女に結婚の申し込みをする。彼女は、医師が明らかにしたよりも自分の病気は重く、彼と結婚することはできないのではないかと思う。しかし、彼女は飛行家の妻となる決心をした。家族はその結婚に強く反対した。飛行家は職業ではない。飛行家は貧しく、貧乏を経験したことがない者が貧乏人と結婚してもうまく行かない。飛行家は事故で死ぬ確率が高いから、彼女はすぐに未亡人になるであろう。その予見は当たり、サン・テグジュペリは着陸に失敗し、事故を起こし、頭蓋骨を骨折する。ヴィルモラン家の人々が彼に職業を変えるように強く要求したので、彼は飛行家の職業を棄て、ブワロン・タイル会社 Tuileries de Boiron に製造検査係として勤める。

ヴィルモランは、サン・テグジュペリに飛行機の操縦を棄てさせるほど魅力的な女性であつたらしい。彼女の母は彼を困った男と思っていたが、彼女は本能的に将来性のある男と思った。

1923 年の夏、ヴィルモランの心は少しずつサン・テグジュペリから離れて行く。彼女の心を傷つけたのは家族の非難であった。彼女は家政婦と共にスイスに出発し、ルノンヴィリエ Renonvilliers に滞在する。サン・テグジュペリが追いかけて来て、彼ら是一緒にパリに戻る。秋になると、ヴィルモランは行き先を告げずに姿を消し、二人の関係は終息する。

また飛行機を操縦してみたいという欲求が募って来て、日曜日にはオルリー Orly にある民間パイロット訓練センターに行き、飛行機を操縦する。さらに、ブワロン・タイル会社での仕事がすんでから、時々小説を書くこともある。母へ宛てた手紙で、次のように書いている。「ママ、ぼくの小説の半分ができた。その小説は新しくて簡潔だと堅く信じている」

サン・テグジュペリはパリの生活に耐え切れなくなって来る。彼を暖かく迎えてくれるソーシーヌ家を訪れることが、彼の最大の慰めであった。文学に関して自信があったルネ・ド・ソーシーヌは、ある日思い切って彼に助言を求めた。彼女は書簡による返答を受け取った。これが、彼女が受け取った彼の最初の手紙である。

書簡 1 (日付なし。おそらく 1923 年秋 [原注])

内容 ルネ・ド・ソーシーヌ (以下書簡では愛称リネット⁹⁾ で表示) は、彼女が書いた短編をアントワヌ・ド・サン・テグジュペリ (以下書簡ではアントワヌ¹⁰⁾ で表示) に渡し、彼にその批評を求めた。登山家ウーズビオ Eusebio⁹⁾ がアルペン・クラブで行った講演と対比させて、彼は彼女の短編を批評する。

「ぼくは彼の話を聴きながら、あなたの短編の簡潔さを考えていた。リネット、勉強しなければならぬ。あなたは個々の事物からその固有の要素を引き出しているし、そうすることによって、事物に固有の生命を与えている。ウーズビオにおいては、対象は抽象的なものにとどまっている。それは、《山頂、日没、夜明け》にすぎない。それらは小道具倉庫から出て来たものだ。彼がそれらを描写すればするほど、ますます非個性的なものになる。

方法も悪いが、むしろ見る眼が欠けている。書くことではなく、見ることを学ばなければならない。書くことは一つの結果だ。彼は対象をとらえて、それを美化しようとする。形容語はペンキの幾重もの層となっている。本質的なものを取り出さず、勝手な装飾を付け加えている。[……]『このような印象はどのように伝えるべきか』と考えるべきだ。すると対象は、それらがあなたの中に生み出した反応から生まれ、対象は深く描写されることになる。ただし、それはもはや遊びではなくなる」¹⁰⁾

「常に印象から出発すべきだ。それが平凡だということはあり得ない。あなたの物語の中には内的なつながりが存在することになるだろう」¹¹⁾

解説 この手紙には、23 歳のサン・テグジュペリが抱いていた文学に対する考えが述べられている。彼はこの考えを終生持ち続け、それに基づいて作品を書くことになるであろう。

まず彼が第一に述べていることは、書く前に事物を見ることを学ばなければならないということである。書くことは見たことの結果である。第二に、事物の本質を取り出すことが重要であって、それを美しく飾ろうとしてはいけない。それは真実をごまかすことである。第三に、対象が心の中に生み出した印象を描かなければならない。こうすることによって、対象は深く描写され、物語に内的つながりが存在することになる。

サン・テグジュペリの文学論が述べられているこの手紙は、彼の文学を理解する手掛かりを与えてくれるので、きわめて重要である。

1924 年の終わりに、サン・テグジュペリはブワロン・タイル会社を辞め、シュレンヌ Surennes のソーレ・トラック製造販売会社 Camions Saurer に就職する。研修を終え、セールスマンとしてトラックの販売に従事する。地方巡りの旅を続け、田舎の人々と接触したが、彼らとどうしても打ち解けることができず、人間嫌いになる。しかし、仕事に励み、ヴィ

9) ウーズビオはあだ名。親友アンリー・ド・セゴーニュ Henry de Ségogne のこと。

10) SAINT-EXUPÉRY, *op. cit.*, p. 302.

11) *Ibid.*, pp. 302-303.

ルモランとの婚約解消の打撃から立ち直ろうとする。

田舎のカフェから、彼はルネ・ド・ソーシーヌや友人たちにたくさんの手紙を書く。手紙の多くはデッサンで飾られている。

書簡 2 (ドンピエール・シュール・ペーブル Dompierre-sur-Besbre。日付なし)

内容 巡回している田舎の小さな町々の描写。ドンピエール・シュール・ペーブルでは、アントワヌは土地の青年たちが上演した芝居を見に行く。ロアーヌ Roanne に着いたときには雨が降っていて、悲しい気分である。クルテ大通りしかないモンリュソン Montluçon の町。素晴らしいアルジャントン・シュール・クルーズ Argenton-sur-Creuse の町。

手紙の終わりに、次のように記す。

「リネット、これでお別れだ。ぼくはムーラン Moulins に行き、そこでこの手紙を投函することにする。モンリュソンの局留めで、簡単でもいいから返事をください。くれますね？ サン・ギョーム通りはあまりにも遠すぎるんだから」¹²⁾

解説 トラックのセールスマンとして訪れた冬の田舎の町々の描写。淡々とした描写には、アントワヌの寂しい気持が反映されている。橋の欄干に座って、風に飛ばされ、川に落ちて流されて行く帽子を見えなくなるまでじっと見詰めているとき、彼は憂うつな気分であった。悲しみをいやしてくれるのは、リネットの手紙しかない。それで彼は、手紙をくれるように彼女に懇願する。

この時期のアントワヌは、ルイーズとの悲しい恋の痛手からまだ立ち直れず、深い悲しみの中にあった。今後彼の愛は次第にリットに向けられて行く。

サン・テグジュペリは、彼と合流したウーズビオと一緒に、モルヴァン Morvan 地方を旅する。つづいて、一人でクルーズ Creuse 地方の市場調査をする。

書簡 3 (モルヴァン、日付なし)

内容 モルヴァンの絵葉書。古いわらぶきの家（アントワヌとウーズビオの連名の絵葉書）。アントワヌとウーズビオが、交互にリネットに優しく話しかける。

「アントワヌ—— 今度はぼくが優しい言葉をかける番だ。あなたのためなら、ぼくたちは何でもします」¹³⁾

12) *Ibid.*, p. 309.

13) *Ibid.*, p. 311.

モルヴァンの絵葉書(II)。ジャステリュクス城。同じように、アントワヌとウーズビオが交互にの短文を記す。

「アントワヌ——ぼくは今、ウーズビオと喧嘩をしてしまった。彼は育ちがよくない。彼の社交界用の名刺の裏に、もう遠慮しないでそう書くことにする。ぼくたちは、素晴らしい避難所であるサン・ギヨーム通りのことを考え、あなたの友情に感謝するために仲直りすることにした」¹⁴⁾

解説 アントワヌとウーズビオの連名の絵葉書。二人とも冗談を言っているが、その言葉の一つ一つにリネットに対する暖かい友情が込められている。

書簡 4 (ゲレ Guéret, 192……年某月某日)

内容 アントワヌは短編を書き上げたことをリネットに知らせる。

「この短編は自分自身で素晴らしくよくできたと思っているが、あなたに早く読んで聞かせたい。それをどうしても好きになってもらいたい。そうでなければ、ぼくはもう何も書けない」¹⁵⁾

解説 田舎の町々を巡り、同じようなホテルに泊っての単調な生活。そのような生活を送りながら、アントワヌは短編を書き上げた。「それをどうしても好きになってもらいたい。そうでなければ、ぼくはもう何も書けない」という言葉の中には、リネットに対する彼の深い愛情を感じ取ることができる。彼は、明白な愛情表現を決して用いず、このような言葉によって愛情を告白する。ここに、彼の愛の手紙の美しさがある。

地方からサン・テグジュペリがパリに戻って来ると、仲間たちが集まり、カフェを巡り、議論を戦わせた。ある日、ソーシーヌとその姉のロール Laure、そしてサン・テグジュペリがカフェに集まった。彼の文学的意見を聴くことが目的であったが、丁度そのとき、ピトエフ Pitoëf 一座がコメディ・デ・シャンゼリゼ Comédie des Champs-Élysées で「各人がその真実を」*Chacun sa vérité* を上演していたので、話はピランデルロ Pirandello¹⁶⁾の方にとれてしまった。

ピランデルロの話になると、サン・テグジュペリは不機嫌になった。ロールがピランデルロの哲学的芝居をほめたたえたとき、彼は蒼白になった。なぜ彼が突然怒り出したのか。朝の8時に、ソーシーヌのもとに分厚い手紙が届いた。

14) *Ibid.*, p. 313.

15) *Ibid.*, p. 314.

16) イタリアの劇作家・小説家(1867-1936)。人間の内面と外観の分裂から生じる苦悩を描いた。

書簡5（パリ、日付なし。おそらく1925年春）

内容 アントワヌはなぜ怒ったかを説明する。

「ぼくは、考えの表明を、テニスのボールや社交的やり取りの貨幣と見なすことはできない。ぼくには社交的素質など全然ない。考えることは遊ぶことではないのだ。だから、会話がぼくの気にかかる問題にぶつかったときには、ぼくは不寛容になるし、おろかにもなる。ウーズビオがぼくと議論できないと言うが、それは正しい。しかし、（ピランデルロについて）ぼくが『門番の形而上学』と言ったことについてはすごく後悔しているが、怒り出したことについては全く後悔していない」¹⁷⁾

アントワヌは、リネットがピランデルロをイブセン Ibsen¹⁸⁾と比較したことについて、その間違いを指摘する。

「いいかい、リネット——これは文学的問題を論じる以前のことなのだが——イブセンのような人物をピランデルロのような人と比較する権利はだれにもないんだ。一方は、高尚な問題に関心を抱いた人である。彼は、一つの社会的役割、一つの道徳的役割、一つの影響力を持っていた。彼は、人々が理解しながらないことを人々に理解させるために書いたのだ。彼は、もっとも内面的な問題、ぼくが素晴らしいと思うのは、特に女性問題に取り組んだことだ。要するにイブセンは、成功したか否かは別として、ぼくたちに新しいロト遊び（数合わせ遊び）ではなく、一つの糧を提供しようと努力したのだ」¹⁹⁾

アントワヌは、ピランデルロがだれのために戯曲を書いたのかについて論じる。

「他方、ピランデルロはおそらく注目すべき演劇人であるが、[……] 社交界の人びとを楽しませるために、彼らがすでに政治や一般概念や姦通劇をもてあそんだように、今度は形而上学をもてあそぶことができるようにするために、創造され、この地上に生まれた男なのだ」²⁰⁾

さらに彼は、論点を列挙してピランデルロを批判する。

① 形而上学の問題を舞台化したのは、彼が最初ではない。② 彼の戯曲の主題に独創性を見出すことはできない。③ 彼の戯曲には面白さは全くない。④ 社交界の人たちは、形而上学を理解しようと望んではいない。彼らが望んでいるのは、もはや何も理解しないことであり、自分たちのすべての概念が覆されたと感じることである。彼はそのような人たちのために戯曲を書いた。

そして彼は、ピランデルロの形而上学を拒否するように勧める。

「それ故、人間の理解のために努力したイブセンを愛し、ピランデルロを、すべての偽りのめまいを拒否しなければならない。これは難しいことである。曖昧なものは明白なものより魅力的だ。ある現象について二つの説明があれば、人びとは本能的に曖昧なものに味方する。なぜなら、他の説明、つ

17) *Ibid.*, p. 317.

18) ノルウェーの劇作家(1828-1906)。近代劇の確立者。演劇を単なる娯楽から考させるものに変えた。

19) SAINT-EXUPÉRY, *op. cit.*, p. 317.

20) *Ibid.*, pp. 317-138.

まり真実の説明は、単純で輝きがなく、頭髪を逆立たせないからだ」²¹⁾

アントワヌは社界の人びとを嫌い、人生と闘って生きている人びとを愛する。

「ぼくは、食べたり、子供に食物を与えたり、次の月までなんとか生きて行く必要によって、より密接に人生と結び付いている人たちが好きだ。彼らの方が人生についてより多くのことを知っている。昨日ぼくは、バスの乗降口で、5人の子供を連れた、髪を乱した女性と隣り合った。彼女は子供たちに多くのことを教えていたし、ぼくにも多くのことを教えてくれた。社交界の人びとは、ぼくに何一つ教えてくれなかった」²²⁾

解説 リネットと姉のロールがピランデルロの「各人がその真実を」をほめたたえたとき、またリネットがピランデルロをイブセンと比較したときも、アントワヌは憤激した。

なぜ彼が怒ったのかがこの手紙で説明されている。イブセンは、もっとも内面的な問題、特に女性問題に取り組み、社会的・道徳的役割を果たし、社会の進歩的改革に貢献した。一方ピランデルロは、形而上学の問題を舞台にのせるという新しい手法を開発したが、それは社交界の人びとを楽しませただけであって、社会的な影響力は全く持たなかった。アントワヌは、このようなピランデルロをイブセンと比較するのは間違いであると指摘する。

彼は論点を整理し、詳細にわたってピランデルロを批判する。そしさらに、彼の考え方が斬新なものではないこと、彼の問題の提出の仕方がまずいため、その問題は何の意味も持たないこと、「真理」という語や「存在」という語の一般的定義に、形而上学においてきわめて抽象的にその語を定義する際にしか適用できない論理を適用させている点などを指摘する。

そして、リネットに忠告する。絶えざる訓練によって、物事を正確に判断できる思考を養わなければならない。イブセンを愛し、ピランデルロを拒否しなければならない。思想に感動するのではなく、思想を理解しなければならない。

ピランデルロ批判を通して、アントワヌの文学的立場が明らかになる。文学においては、形而上学的な問題ではなく、具体的な問題、人間の生と密接に結びついた問題を取り上げなければならない。したがって彼は、人生と闘いながら必死に生きる人たちに注目する。彼にとっては文学は遊びではない。

彼のピランデルロ批判は、文学の多様性を認めようとししない独断的批判と見なすこともできようが、文学に対してこのような考え方を持つ作家がいるということは貴重なことである。

21) *Ibid.*, p. 324.

22) *Ibid.*, p. 325.

サン・テグジュペリは、15カ月間トラックのセールスマンとして働いたが、トラックは1台しか売れなかった。この仕事は自分に向いていないと判断する。仕事を辞め、彼がかつて在籍したボジューエ学院の副校長であるシュドゥール Sudour 神父の仲介で、フランス航空会社 Compagnie Aérienne Française に入社する。飛行機はまだ恐ろしいものと考えられていたので、客はほとんどなく、飛ぶことなく何日も過ぎる。

パリに住むサン・テグジュペリの母方の従姉²³⁾が、上流婦人として、多くの作家を自分のサロンに迎え入れていた。彼はその家で、アンドレ・ジッド André Gide²⁴⁾、ラモン・フェルナンデス Ramon Fernandez²⁵⁾、後に彼の作品を出版するガストン・ガリマル Gaston Gallimard²⁶⁾に出会った。そして彼らを通して、「新フランス評論」*Nouvelle Revue Française* 誌の人たちと知り合った。この雑誌の寄稿者の一人であるジャン・プレヴォー Jean Prévoost²⁷⁾は、サン・テグジュペリが航空機に関する小説を書いているのを知り、読ませてもらうためにその原稿を受け取った。

「銀の船」*Navire d'Argent* 誌の編集次長であったプレヴォーは、同誌の創刊者で編集長であったアドリエヌ・モニエ Adrienne Monnier に、青年作家としてサン・テグジュペリを紹介した。彼の中編小説「ジャック・ベルニスの脱出」*L'Évasion de Jacques Bernis* は、ページ数に限りがあったため、「銀の船」の1926年4月号に、その八つの断編しか掲載されなかった。それは「飛行家」*L'Aviateur*²⁸⁾というタイトルで掲載された。資金がなく、それが最終号となった。彼の名は、ライナー・マリア・リルケ Rainer Maria Rilke²⁹⁾、ラモン・フェルナンデスなどの名と共に印刷された。

1926年夏の初めに、姉のマリー・マドレーヌ Marie-Madelaine が肺結核で死に、サン・テグジュペリは悲嘆にくれる。ほとんど失業状態にあった彼は、今度もまたシュドゥール神父の紹介で、ラテコエール航空会社 Compagnie d'Aviation Latécoère に入社する。

書簡6（アゲー Agay, [1926年10月]）

内容 アントワヌは、リネットに手紙を書かなかった理由を述べる。

「ぼくがあなたに手紙を書かなかったことは事実だが、それは、返事をあまりにも期待し過ぎてしまうからであり、裏切られる期待はむなしいからだ。許してくれ。ぼくがあなたを忘れていたからだとは信じないでくれ。全くの逆だ」³⁰⁾

23) 当時(1925-1926)トレヴィーズ Trévis 侯爵夫人であったイヴォンヌ・ド・レトランジュ Yvonne de Lestrange。

24) フランスの小説家(1869-1951)。20世紀前半のフランスの代表的作家。

25) フランスの批評家(1894-1944)。「新フランス評論」の代表的批評家。

26) フランスの出版者(1881-1960)。「新フランス評論」を出版した。

27) フランスの小説家(1901-1944)。民衆主義作家の一人。

28) 『南方郵便機』の初稿〔原注〕。

29) ドイツの詩人(1875-1926)。愛と孤独と死の問題を追究した。

30) SAINT-EXUPÉRY, *op. cit.*, p. 328.

彼は自分を卑下した後、ラテコエール航空会社の入社に触れる。

「全く、ぼくは人に好かれるタイプじゃない。せいぜい、もっとも遠いどこかの航空路を熊のように飛行するのにふさわしい男だ。

明日パリを離れる。ラテコエール航空会社は三つの新しい航空路を開発している。アルジェリアと、スペインと、南アメリカに。その一つに採用されることになっているので、アゲーで社の呼び出しを待つことにする。あまりにも多くのことを期待させ、何も約束を守ってくれないこのパリにうんざりしている。それはぼくのせいだ」³¹⁾

解説 この手紙には、愛情の直接的表現は全くないが、リネットに対するアントワヌの愛情の告白と言えるような言葉がちりばめられている。「返事をあまりにも期待し過ぎてしまうからであり、裏切られる期待はむなしいからだ」。「ぼくがあなたに会いに行くときには、話すことをたくさん持って行く」。「あまりにも多くのことを期待させ、何も約束を守ってくれないこのパリにうんざりしている」。このような愛情の表現は愛情の直接的表現よりも人の心を打つが、リネットは彼の気持を全く理解しなかったように思える。

サン・テグジュペリは、アゲー Agay 伯爵夫人となった妹のガブリエル Gabrielle のもとに行き、会社の呼び出しを待つ。アゲーの屋敷は彼にとっては唯一の天国であり、そこにいると、すべての苦しみが消え去る。

第一次世界大戦において、歩兵隊員として戦闘に参加し、ヴェルダン Verdun で負傷したディディエ・ドーラ Didier Daurat は、その後戦闘機隊の司令官となった。彼は大战終了後すぐにラテコエール航空会社に入った。彼がいなかったら、この航空会社は長く存続できなかったであろうし、スペイン、モロッコを越えてその航空路を延ばすこともできなかったであろう。

サン・テグジュペリはトゥールーズ Toulouse に赴き、ディディエ・ドーラと会見し、空を飛びたいという強い希望を述べた。ドーラは、まず会社の人々の中に溶け込まなければならない、と言い、その仕方を詳しく説明する。サン・テグジュペリは、秘密結社のように思えるこのグループに溶け込めるかどうか不安になる。

書簡 7 (トゥールーズ, [1926 年 10 月])

内容 夜、アントワヌは、心の中に作り出したリネットの像に向かって話しかける。

「ぼくはあなたのそばに来て座る。これもまた、おそらくあなたが許してくれないことだ。あなたをいら立たせることだ。しかし、ぼくがそんなことを全く意に介さないことを知ってくれたらなあ。なぜならぼくは、今夜自分の好きなようにあなたを作り上げてしまっているからだ。あなたがどんなに

31) *Ibid.*, p. 329.

親切になっているかを知ってくれたらなあ。結局、これがあなたとできる唯一の会話なのだ。ぼくが自分自身の中に作り上げる会話。あなたは忍耐つよい。頭がよくて、何でも理解してくれる。そしてぼくはおしゃべりになる。これは素晴らしい。ぼくは自分で勝手に作り上げた友だちに対して何という復讐をしているのだろう」³²⁾

彼は自分に何も与えてくれないリネットを非難する。

「ぼくはたくさんの憂うつに耐えることができない。そのため、あなたは冷たい人だと簡単に言える。ぼくは、苦痛を感じることなく、意地悪でそう言っているのだ——あなたは苦痛を与えることも好きじゃない（あなたは何一つ与えることが好きじゃない）」³³⁾

解説 アントワーズが自分で勝手に作り上げたリネットは、親切で、何でも理解してくれる。このようなリネットの像を描き出すことによって、彼は不親切で、何も理解してくれない現実のリネットを皮肉たっぷりに非難する。このような非難の仕方は見事である。しかし、「あなたは苦痛を与えることも好きじゃない」という言葉は、直接的でかなり厳しい非難である。

リネットの冷淡さをとがめた手紙であるが、自分で勝手に作り上げたリネットに向かって話しかけているところに、彼女への彼の愛情を感じ取ることができる。

書簡8（タンジール Tanger, [1926年10月4日]）

内容 アントワーズは、トゥールーズを発って、モロッコのタンジールに来た。手紙をくれるよう催促する。

もしサン・テグジュペリが1926年の秋にラテコエール航空会社に入社しなかったら、今日この航空会社のメンバーやその指導者については全く知られなかったであろう。ヴァイオリニストのルネ・ド・ソーシーヌがサン・テグジュペリに対して冷やかでなかったとしたら、彼は航空会社に入ることがなかったであろうし、航空会社の栄光も知られなかったであろう。

サン・テグジュペリは、数回の試験飛行の後で、カサブランカ Casablanca までの調査飛行を命ぜられる。アンリー・ギョメ Henri Guillaumet の操縦する飛行機に乗ってこの使命を遂行する。

書簡9（トゥールーズ, 1926年10月22日）

32) *Ibid.*, pp. 331-332.

33) *Ibid.*, p. 332.

内容 アントワヌは、孤独の中であって、リネットの手紙を待ち望んでいる。

「この土地で激しい孤独感に襲われている。手紙を書いてほしい——それはサン・ギョーム通りの夜会には値しないかもしれないが、やはりぼくにはとてもうれしいのだから」³⁴⁾

彼は豪雨の中で、1時間新しい飛行機のテストをする。

解説 アントワヌは、まだトゥールーズの新しい生活に慣れることができず、時々激しい孤独感に襲われる。リネットからの手紙を期待するが、むなしい。しかし彼は、彼女を真剣に思い続けることを止めない。

書簡 10 (トゥールーズ, [1926 年 10 月])

内容 アントワヌはリネットの無情さを責める。

「リネット、あなたはいい友だちじゃない。どうして返事を出すまいと頑張るの?」³⁵⁾

「ぼくは、あなたが思っているよりずっとあなたを恨んでいるんだ」³⁶⁾

そして手紙の催促。

「とにかく、ぼくが死んでしまう前に手紙を書いてくれ。死んでしまったら、手紙なんか全くどうでもいいんだし、あなたをそっとしておくから」³⁷⁾

書簡 11 (トゥールーズ, 1926 年 10 月 24 日)

内容 アントワヌは友だちのことを思う。

「友だちが遠くにいるのでほんとうに寂しい。ここにはごくわずかの友だちしかいない。それだけに一層友だちが恋しくなる。ずっと後になって、立派な白ひげをたくわえて戻るときには、あなたがたは皆ぼくのことを忘れてしまっているだろう」³⁸⁾

彼は飛行機の素晴らしさについて語る。

「リネット、飛行機は素晴らしいものだということが分かるだろうか。ここでは、それは遊びではない。だからこそぼくは好きなんだ。ブルジョア時代のようにスポーツではなく、何か別の、説明不可能なもの、一種の戦争なんだ。雨の中を夜明けに飛び立つ郵便機の出発は美しい」³⁹⁾

34) *Ibid.*, p. 336.

35) *Ibid.*, p. 338.

36) *Ibid.*, p. 338.

37) *Ibid.*, p. 339.

38) *Ibid.*, p. 341.

39) *Ibid.*, p. 341.

解説 アントワヌは、この手紙では、リネットの冷たさをとがめてはいない。彼は初めて、飛行機の素晴らしさについて語っている。遊びとしての操縦ではなく、郵便機を操縦することに喜びを見出す。この事実から、彼が一生の職業としてパイロットの職を選ぼうとしていることを知ることができる。今後のリネットへの手紙では、飛行体験が語られることが多くなるだろう。飛行に喜びを見出すにつれて、リネットを思う気持は次第に弱まって行くだろう。

書簡 12（アリカンテ，[1926 年 11 月]）

内容 アントワヌは昨日、リネット宛に手紙を 3 通書いたが、次々と引き裂いた。彼女にあまり多くのことを話しても無駄だと思った。しかし結局、自分に起こったことを話すために彼が選ぶのはリネットである。

「ぼくはなぜ手紙を書くのかよく分からない。ぼくには、自分に起こるささいなことを打ち明ける友だちがどうしても必要なんだ。それらを分かち合える友だちが。ぼくがなぜあなたを選ぶのかも分からない。あなたは全くの他人になってしまった。」⁴⁰⁾

彼は飛行中に、死の恐怖にさらされた。

「3000 メートルから降下していたとき、ぼくは衝撃を感じた——異常が起きたと思った——ぼくの飛行機の調子が次第におかしくなって来た。2000 メートルぐらいで、全力で機体の立て直しをはかったが、もはや自由がきかなくなった。誰もみ降下が確実だと思ったので、万年筆ではっきりと計器盤の上に、『異常が起きた。搜索頼む。墜落回避不可能』と書いた。ぼくは不注意で死んだと非難されたくなかった。その考えにぼくはいら立っていた。ぼくは驚きながら、激突しようとしている野原を見ていた。恐怖のために真っ青になり、顔がつるつるになるのを感じた。底なしではあったが醜くない恐怖。定義できない新しい知性」⁴¹⁾

彼は墜落を回避できた。飛行機から飛び降りたとき、彼は何も言わなかった。話したとしても、本質的なことはだれにも理解できないと思ったから。

解説 リネットは全くの他人になってしまったと思いながらも、アントワヌが飛行体験をだれかに語りたと思ったとき、結局彼が選んだ人はリネットであった。彼は自分が語れることを彼女が全然理解しようとはしないことを分かっていた。

書簡 13（トゥールーズ，[1926 年 11 月] 24 日）

内容 リネットが返事をくれないので、アントワヌは怒り出す。

40) *Ibid.*, p. 344.

41) *Ibid.*, p. 345.

「ぼくはもうあなたに手紙を書かない。たとえあなたがぼくに手紙を書いてくれたとしても、そんなものはどうでもいい。約束した晩に書くことができなかったのだから。ぼくはどうしてこの手紙を出すのか分からない。先日3通引き裂いたし、4通目も引き裂いてもいいんだ。これはぼくの別れの手紙だ」⁴²⁾

解説 リネットが手紙をくれないことに怒ったアントワヌは、非常に激しい調子の手紙を書き、彼女に別れの宣言をする。手紙を書く必要はない、と言いながらも、彼女から謝りの返事が届くことを期待している。

書簡 14 (トゥールーズ, [1926 年 12 月])

内容 アントワヌは先日の手紙のことをリネットにわびる。そして、旅したモロッコとスペインのことを語る。

山の多いスペインを飛ぶときには、山に激突する危険があるので、雲に閉ざされないように飛ばなければならない。

「だから、非常に柔らかで非常に穏やかな白い平原の一つを見て、『その下は死の世界だよ』という言葉を出すと、ぼくは目的地に着くのはむずかしいと思い、孤立した感じになる——でもその感情は素晴らしいと言えるものだ」⁴³⁾

解説 リネットから手紙が届くと、アントワヌの怒りはただちに鎮まり、おわびの手紙を書く。手紙の内容の大部分は飛行の体験である。目的地に着くのがむずかしいと思ったとき、彼は孤立した感じになる。この孤立感も彼にとっては大きな喜びである。

書簡 15 (ペルピニャン Perpignan, [1926 年 12 月])

内容 アントワヌは、手紙をくれないリネットをまた責める。

「リネット、あなたはぼくに対してほんとうに不親切だ。郵便物が届くたびに失望したくないから、もう絶対に手紙を書かない。」⁴⁴⁾

ペルピニャン上空から見た情景の描写。

「上空から見ると、ピレネー山脈の雪はすべてばら色に染まっていた。遠くに見えるナルボンヌ Narbonne の池々もばら色だった。こんな情景が想像できるかい？ エンジンを低速回転にして、ぼくは青く染まったペルピニャンに向かって流れて行った。実に素晴らしかった」⁴⁵⁾

42) *Ibid.*, p. 348.

43) *Ibid.*, p. 352.

44) *Ibid.*, p. 354.

45) *Ibid.*, p. 356.

解説 アントワヌは、飛行機から見た感動的な情景について語っている。このような情景描写は、今後の彼の小説において固有なものとなるであろう。

書簡 16（トゥールーズ，[1926 年 12 月]）

内容 アントワヌは、リネットから 2 通手紙を受け取った。ラバト Rabat 近くで故障して、事故を起こした。スペインでは、嵐にぶつかり、その中で 9 時間も踊った。

解説 アントワヌは、リネットから手紙が来ないと、もう手紙を書かないと決心するが、彼女の手紙を受け取ると、決心が揺らぎまた手紙を書く。

書簡 17（アリカンテ，1927 年 1 月 1 日）

内容 アリカンテの町の描写。椰子の木，生暖かい星々，聞こえも見えもしない，ほとんど風も送って来ない慎み深い海。アントワヌは幸福であった。

「ぼくには幸福だと感じるたくさんの理由があった。辻馬車の御者たちもその理由だ。靴を念入りに磨き，撫でて，終わると笑いかけた靴磨きもそうだ。希望に満ちた素晴らしい新年だ。今日は生きることが実に豊かに感じられる」⁴⁶⁾

書簡 18（アリカンテ，1926 年 [1927 年] 1 月 2 日）

内容 アリカンテでの生活描写。アントワヌは，大道の写真屋 3 人に写真を撮ってもらう。美男子ではないので，恰好をつけるため，椰子の木にもたれる。

解説 アントワヌは，アリカンテの明かるい太陽の下で，生きることが素晴らしいことだと感じた。

スペインの山々の上を飛んだ 3 カ月の実習後，サン・テグジュペリはカサブランカ——ダカール Dakar 路線に配属される。世界でもっとも乾燥した 2300 キロメートルにおよぶ海岸の上を飛ばなければならない。しかも，砂漠の周辺には，ムーア人の反抗部族が放浪している。砂漠に不時着した郵便機のパイロットが，反抗部族に捕えられ，金品を脅し取られたり，拷問を受けたりすることがよくあった。

書簡 19（カサブランカ，[1927 年] 1 月 3 日）

46) *Ibid.*, pp. 359-360.

内容 午前1時。出発は5時間後であるが、アントワヌはもう目覚めている。外では嵐が吹き荒れている。

「リネット、夜になると、ぼくは昼とは違った人間になってしまう。ベッドの中で目を開けていると、時々少し不安になって来る。霧が出ると予告してくれたのが気に入らない。明日、事故で死にたくない。世界は大したものを見失わないだろうが、ぼくはすべてを失うことになる。ぼくが所有している友情、思い出、アリカンテの太陽のことを考えてほしい」⁴⁷⁾

アントワヌは、砂漠に不時着したパイロットが、モール人に虐殺される恐れがあるという知らせを受け取る。

「リネット、今夜ぼくは兎のように不安だ。あのダカールの話が気に入らない。聞いたところによると、『興奮しているので、今度故障で不時着したパイロットたちは、モール人に虐殺されるだろう』ということだ。モール人に虐殺される……。ぼくはこの言葉が夜唸り声を立てるのが嫌だ。夜、すべてがぼくにははかないように思える」⁴⁸⁾

解説 アントワヌは、昼は危険も死も恐れず飛行するが、夜になると不安になり、死ぬことが恐ろしくなる。

書簡 20 (カサブランカ, [1927年1月14日])

内容 アントワヌは飛行の体験について語る。飛んでいると、地図の間違いを知ることができる。山々は飛行機を引き下げる力を持ち、3000メートルから1000メートル以下まで引きずり下ろす。そのときには、谷の中を通して逃げ出さなければならない。

解説 手紙の内容の大部分は、飛行の体験である。体験を語る言葉には自信と喜びがあふれている。

1927年10月、サン・テグジュペリは、スペイン領リオ・デ・オロ Rio de Oro の不順地区の真ただ中にあるカップ・ジュビー Cap Juby の飛行場長に任命された。彼は18カ月間そこに留まることになる。彼に任された役目は二つあった。郵便機の着陸の継続を求めるためスペイン総督と交渉すること、砂漠に不時着したパイロットと、できれば郵便物と飛行機も救出すること。

サン・テグジュペリは完璧に任務を果たした。スペイン軍との交渉もムーア人との交渉も順調に行き、フランスの飛行機の離着陸は支障なく行われるようになった。彼がカップ・

47) *Ibid.*, p. 365.

48) *Ibid.*, p. 365.

ジュビーに滞在中、飛行機が砂漠に不時着しない日はなかった。機体の回収は、それを破壊しようとする反抗部族との競争であった。

彼はカップ・ジュビーで、「南方郵便機」*Courrier Sud*を書いた。この小説の主人公ベルニス Bernis は、2年間のアフリカ勤務の後、休暇を得てパリに帰る。久し振りに見たパリの風景も、久し振りに会った友人も彼には新鮮には見えず、そこから脱出したときのままでむなしい。そのようなとき、彼がアフリカにいたときしばしば思い起こした幼友だちのジュヌヴィエーヴ Geneviève に再会する。

彼女には平凡な夫がいる。ベルニスは、彼女が15歳のときと全く変らない美しい魂を持っているのを見出して喜ぶ。彼女の子供が病気で死ぬ。それまでは、子供を通して二人は形式的に結ばれていたにすぎないので、子供の死後、彼女の心は夫から離れて行く。彼女はベルニスを恋い慕うようになる。ある日突然彼女は、彼のところに駆け込んで来て、「あたしを連れ出してください」と叫ぶ。彼女の夫が出張で留守したとき、二人は駆け落ちする。駆け落ちの間にベルニスは、彼女がかつての幼友だちであった頃の彼女とはすっかり変わってしまったのを発見する。二人はあらかじめ決められていたかのようにパリに戻って来る。

ベルニスは、ジュヌヴィエーヴと別れた後、郵便機に乗り、トゥールーズから南米へ向かって出発する。龍巻を伴った熱風に巻き込まれて砂漠に不時着する。朝、故障を直して飛び立つが、その後消息を絶つ。ベルニスの友だちが、反抗部族に襲われ射殺された彼の死体を発見する。

サン・テグジュペリの「南方郵便機」も、彼の他の作品と同様に、パイロットとしての体験に基づいて書かれた。特にルネ・ド・ソーシーヌとの悲しい愛の思い出とカップ・ジュビーでのさまざまな体験が元になっている。それ故、ジュヌヴィエーヴのモデルはソーシーヌであると考えることができるであろう。

ベルニスはジュヌヴィエーヴの中に、自分の求めているものを見出そうとしたが見出すことができず、彼女との愛に結末をつけて、郵便機に乗り南米に向かって出発する。彼はパイロットという職業に、まだそれが何かは分からないが、自分が求めているものを発見しようとする。ベルニスと同様にサン・テグジュペリも、ソーシーヌとの愛に結末をつけ、大空を飛ぶことに人生の意義を見つけようとする。

南米では、すでに5年前から、航空郵便会社 *Aéropostale* によって航空路の開拓が続けられていた。サン・テグジュペリは、航空郵便会社の子会社のアルゼンチン航空会社 *Compagnie Aeroposta Argentina* の南米開発主任としてブエノス・アイレス *Buenos Aires* に派遣されることになった。

書簡 21（リスボン Lisboa, 1929 年 9 月 12 日）

内容 絵葉書。南米への出発の知らせ。

1929 年 10 月 12 日、サン・テグジュペリはブエノス・アイレスに着いた。彼の指揮下において、まずアルゼンチン南部への航空路の開拓が行われた。アンデス山脈から大西洋に吹き下ろす恐ろしい風によってあらゆる物が削り取られ裸になってしまった土地、石が飛び疾風が人を倒し、丈のごく短い草しか生えない土地、それがパタゴニア地方である。この土地に次々と飛行機の着陸場が建設され、最南端のホーン岬 cap Horn の近くまで航空路が延長される。

サン・テグジュペリは、ブエノス・アイレスに着いて数週間経っても、この町に適応することができなかった。飛行機の操縦だけが楽しみであった。

1930 年の初めに、リネット・ド・ソーシーヌから手紙を受け取り、1 月 13 日に返事を書いた。

書簡 22（ブエノス・アイレス, [1930 年] 1 月 13 日）

内容 アントワーンにとって、ブエノス・アイレスは耐え難い町である。過去の素晴らしいことが思い出される。

「ぼくは今生活しているアルゼンチン——特にブエノス・アイレス——が大嫌いだ。そのため、忘れていた素晴らしいたくさんのものがいっせいに押し寄せて来るかのようだ。ポートワイン、蓄音機、映画から帰るときの夜の会話。リップのボーイ、ウーズビオ、ぼくの魅力的な貧困。あの当時は日々が月の初めと終わりで異なった色を持っていたから、それらがとても懐かしい」⁴⁹⁾

彼はアルゼンチン航空会社の開発主任として、3800 キロメートルの航空路を受け持っている。その航空路が毎秒、彼に残されていた若さともっとも大切な自由を吸い取ってしまう。一昨日は極南から戻って来たが、一日に 2500 キロメートル飛んだ。

かつて彼は、自分を理解してくれなかったリネットをすごく恨んだが、今は恨みは消え去った。

「ぼくが苦痛なしにあなたに話すことができるのは、ダカール以来初めてだ。ぼくはあなたをとても恨んだ！ そうしたいとき、あなたが全く何も理解しようとしなのは奇妙なことだ。しかしながら、遠い昔のことは害を与えない。ぼくは無分別で滑稽な青年だった。正確に言えば——ダカール以前は——青春の夢にだまされていた。青春の希望によっても。あなたの方は非常に理性的だった。少なくともそう思う。それはぼくには苦しかったが、それからそれでよいと思った。今は何とも思っていない」⁵⁰⁾

49) *Ibid.*, p. 371.

50) *Ibid.*, p. 373.

解説 アントワーンのリネットに対する恨みはすっかり消えてしまった。彼の唯一の楽しみは操縦することである。視察や実験や新しい航空路の調査で忙しい。リネットへの愛を諦め、パイロットとして飛ぶことに生きがいを見出したことが、この書簡から読み取ることができる。

1930年5月10の夜、総支配人ブランヴィル Prunville の乗った飛行機が、濃霧のため方向を見失い、海上に墜落し、彼は死亡した。5月13日、メルモーズ Mermoz は、21時間で大西洋を横断する偉業をなし遂げた。6月13日、ギョメの郵便機がアンデス山脈に墜落し、彼は行方不明になった。大捜索によっても発見できなかったが、6日目に自力で山を降りて来た。

1930年7月、あらかじめサン・テグジュペリに知らせずに、ソーシーヌがリオ Rio にやって来た。

書簡 23 (ブエノス・アイレス, [1930年7月18日])

内容 アントワーンは、リオに来ることをあらかじめ知らせてくれなかったことに対して、リネットをとがめる。

「あなたは多くの思い出と交り合い、過去の生活の非常に大きな部分となっているので、ぼくがフランスに行くなら、あなたに会わないとは考えもしなかっただろう。

あなたはリオにいるのだから、会えるのだということを考えてくれ。奇妙なことに、ぼくのすべての思い出が古くなってしまったのを知って、自分が少し年を取ったように感じる」⁵¹⁾

解説 アントワーンはリネットに、リオに来るときにはあらかじめ知らせてくれるように手紙で頼んでいたが、彼女はそうせずに突然リオにやって来た。彼はがっかりし、過去のすべての思い出が古くなってしまったように感じる。このように冷たいリネットを、彼は直接的ではなく、間接的に優しく非難する。

書簡 24 (ブエノス・アイレス, [1930年7月25日])

内容 アントワーンはリネットに、リオに彼女に会いに行けるかどうか分からないと知らせる。

1930年9月に講演旅行でブエノス・アイレスを訪れたバンジャマン・クレミュー Benjamin Crémieux⁵²⁾ の紹介で、サン・テグジュペリは、サン・サルヴァドル出身で、グアテ

51) *Ibid.*, p. 375.

52) フランスの批評家(1888-1944)。イタリア文学の紹介者として知られる。

マラの作家の未亡人であるコンスエロ・スンシン Consuelo Suncin と知り合った。彼はただちに彼女を恋し、間もなく結婚を申し込んだ。彼女はすぐには返事をせず、1931年の初めにフランスのニース Nice にある自分の所有地へ向かった。サン・テグジュペリは2カ月の休暇を得て、彼女の後を追った。

マドリッド Madrid で、彼は彼女に再会する。二人はパリに戻り、1931年3月の初めに、ニースに向かった。結婚の承諾が得られたので、彼はヴァール Var 県アゲーにある妹ガブリエルの家に彼女を連れて行き、家族に紹介した。間もなく彼女と婚約し、4月12日にアゲーの教会で結婚した。

書簡 25 (アゲー [ヴァール県], 日付なし。おそらく 1931 年春 [原注])

内容 アントワーズはこの2年間、リネットにたくさんの手紙を書いたが、出さずに引き裂いた。けれども、真夜中の今、決意が揺らぎ手紙を書く。

彼は、ほとんど手紙をくれず、彼を理解しようとしなかったリネットに手紙を書き続けた愚かさを反省する。

「時々ぼくは、3日間留守をした後で、モロッコから戻って来た。世界のすべての女性がぼくに手紙をくれる時間があつた無限の3日間。そうであれば、ただ一人の女性には何度も機会があつたはずだ！ぼくはこの3日間の暇を与えるのが好きだった。

ぼくには驚くべきことが準備されていた。それでぼくは、邪魔をしないために散歩に出掛けた。ああ、ほんとうにぼくは純情だった。ほんとうにぼくは、とても不幸な青年だった。夜になると、カフェ・ラファイエットから手紙を書いた。その手紙の文章は重要ではなかったが、言葉の抑揚の下にはぼくの秘密が隠されていた」⁵³⁾

手紙の最後で、彼は現在の心境を語る。

「おそらく、《パリ生活》というジャンソンの不実なトリックと、ギターに合わせたもう一つ別のジャンソンの油断のならない企てがあつたのだ。サムソンの髪を切るためにデリラが歌つたジャンソン。もちろん、サムソンはトリックに気付いていた。

夜は静かに続き、ぼくも静かに眠りに落ちる。ぼくは打ち明け話に警戒している。ぼくは大きな恨みを忘れてしまったのではないかと不安だ。これは重大なことだから。おそらくぼくは、自分の弱さに魅惑されているのだ。ぼくが罠にはまったかどうかは知りたくない。あえて動こうとせず、綱を切ろうとしないサムソン、鳥刺しの罠に捕えられたあの小姓であることに驚嘆しているサムソン」⁵⁴⁾

解説 アントワーズはリネットにたくさん手紙を書いたが、それに対して彼女の返事はほとんどなかった。彼女に返事をくれるように求めたが無駄であった。それでも彼女に手紙を書き続けた愚かさをアントワーズは反省し、そのような自分自身を哀れむ。

この手紙には日付がないが、1931年春に書かれたと見なされている。したがって、アン

53) SAINT-EXUPÉRY, *op. cit.*, p. 378.

54) *Ibid.*, p. 379.

トワヌがコンスエロと婚約中であった時期が結婚後に書かれたことになる。そうであるとすれば、この手紙の最後の言葉はきわめて意味深長である。「《パリ生活》というジャンソンの不実なトリック」というのは、ルネ・ド・ソーシーヌの不誠実のことであり、「ギターに合わせたもう一つ別のジャンソンの油断のならない企て」というのは、コンスエロの誘惑のことであると考えることができるであろう。さらに、「あえて動こうとせず、綱を切ろうとしないサムソン」とは、コンスエロから離れることができずにいるアントワヌのことであると考えることができるであろう。

コンスエロとの結婚に満足できず、まだリネットに未練を残しているアントワヌの気持が、この手紙に表れている。

サン・テグジュペリの「青年時代の手紙」の中に収められている 25 通の手紙のそれぞれについて、それを彼の生涯の中に位置付け、その内容を紹介し、それに対して解説を加えた。

ルイズ・ド・ヴィルモランとの恋愛に破れて以後、サン・テグジュペリの愛は次第にルネ・ド・ソーシーヌに向けられて行った。彼は彼女の愛を得たいと願い、時には不平を言っている人物の色鉛筆で書かれたデッサンも添えて、自分の気持を間接的に伝えた手紙をたくさん彼女に出したが、彼女はほとんど返事をくれず、たまに返事をくれても、それは短くて形式的なものであった。ソーシーヌは彼の手紙を読むことは好きであったが、彼の愛には全く応えようとはしなかった。むしろ彼女は、彼の言い寄りにいら立っていたようである。彼女が自分に全く関心を持っていないということを知りながらも、彼は手紙を出し続けた。ほとんどすべての彼の手紙には幻滅の気持が表れているが、それがこれらの手紙をより一層美しいものにしている。

ヴィルモランもソーシーヌも、上流階級に属する家の娘であった。当時まだ低い評価しか与えられていなかったパイロットという職業についていたサン・テグジュペリにとっては、彼女たちは高嶺の花でしかなかった。彼との交際に対して、彼女たちの家族が反対するのは当然であった。サロンの花形であったソーシーヌは、無口で不器用な《熊》というあだ名を付けられていた男に友情は抱いたが、愛するまでには至らなかった。

もしサン・テグジュペリがソーシーヌと結婚したとしたら、当然パイロットという職業を継続することを断念しなければならなかったであろうから、パイロットとしての体験に基づいて書かれた彼の大部分の作品は存在しなかったであろう。ソーシーヌが彼を愛することがなかったために、彼はパイロットとして空を飛ぶ決意をしたのであり、その体験に基づいた彼の文学が存在することになったのである。彼女が彼を愛してくれなかったことは、当時の彼にとっては不幸なことであったかもしれないが、彼の将来にとっては、また

今日彼の作品を読むことができるわれわれにとっては幸いであった。

主要参考書目

1. 三省堂編修所編「コンサイス人名辞典（外国編）」三省堂，1980 年。
 2. 岩波書店編集部編「岩波西洋人名辞典増補版」，岩波書店，1981 年。
 3. 小学館編集部編「大日本百科事典ジャポニカ」，全 18 巻，小学館，1967 年。
- ※ 論文中のサン・テグジュペリの生涯に関する部分については、「青年時代の手紙」のルネ・ド・ソーシーヌの「序文」およびエリック・デショッドの「サン・テグジュペリ，伝記」を参照して記述した。
- ※ [] 内は編集者によって補足された。